

大阪学院大学
外国語論集

第74号

- J. D. Salinger “Uncle Wiggily in Connecticut” 研究
Waltの「教え」と「隻手音声」…………… 山 口 修 1
- suddenly考 (3) …………… 黒 宮 公 彦 19

平成 29 年 12 月

大阪学院大学外国語学会

大阪学院大学
外国語論集
第74号

平成 29 年 12 月

大阪学院大学外国語学会

J. D. Salinger “Uncle Wiggily in Connecticut” 研究 Walt の「教え」と「隻手音声」

山 口 修

序

J. D. Salinger (1919-2010) の短編集 *Nine Stories* (1953) に収録された “Uncle Wiggily in Connecticut” (雑誌掲載1948、以下、“Uncle Wiggily”) の主人公 Eloise は、夫や娘との関係がうまくいかず日々の生活に満足できずにいる。しかしある日、娘 Ramona の寝姿を目にしたとき「悟り」を体験し、娘への愛情を取り戻す。その後の Eloise の成長については批評家により評価が分かれているが、少なくとも Ramona への愛情が示されたという点で、その体験が彼女にプラスの精神的変化を引き起こしたことは間違いない。彼女を「悟り」へと導いたのは昔の恋人 Walt の存在であり、彼の言動の中にその成功の要因がある。Eloise に影響を与えた Walt の振る舞いは、短編集冒頭に掲げられた “We know the sound of two hands clapping. But what is the sound of one hand clapping?” という「隻手音声」と呼ばれる公案—禅宗で、参禅者に考える対象や手がかりにさせるために示す、祖師の言葉・行動 (『大辞泉』)—と関連づけられるのではないかと考える。本論では、Eloise の精神的成長に影響を与えた Walt の「教え」とはどのようなものだったのか、また Walt の「教え」と「隻手音声」のエピグラフがどのように結びつくのか考えてみたい。

1

まず、Eloise がおかれた状況をみていこう。Paul Levine が “The story . . . concerns not only the loss of love and communication but, most of all, the loss

of innocence” (110) と指摘するように、Eloise は夫や娘との間の愛情やコミュニケーションを失い、物質的には恵まれながらも満足を得ることができない。そして、素直に人を愛するという純真さも失っている。その結果、酒や煙草に依存するような俗物的な生き方をしており、精神的に不安定な状態にある。その不安定さが、娘 Ramona や家政婦 Grace へのイライラした態度に表れている。また Olivia C. Edenfield が、“She [Eloise] appears to be trapped in a neighborhood without anyone to whom she can connect, in a marriage that does not fulfill her, with the expectation that she should mother a child she is too depressed really even to see, much less love” (296) と述べるように、空間的に “confinement” (296) の状態にある。また、友人の Mary Jane との交流も、彼女が訪問の途中で道に迷ったことからわかるように、それほど頻繁に行われていたわけではない。話題も近況報告ではなく古い友人たちのことであり、彼女が時間的にも過去に “confinement” されていることが暗示されている。このような閉塞状況におかれた Eloise がどのように “mother a child”、つまり Ramona への母親としての愛情、役割を自覚していくのかという点に注目したい。

Eloise と Ramona の母子関係について詳しく見ていこう。Eloise と Mary Jane とのおしゃべりの最中、Ramona が帰ってくる。

... “Is that you, Ramona?”

“Yes,” a small child’s voice answered.

“Close the front door after you, please,” Eloise called.

“Is that Ramona? Oh, I’m dying to see her. Do you realize I haven’t seen her since she had her —”

“Ramona,” Eloise shouted, with her eyes shut, “go out in the kitchen and let Grace take your galoshes off.” . . .

“How’re her eyes now?” Mary Jane asked. “I mean they’re not any

worse or anything, are they?”

“God! Not that I know of.”

“Can she see at all without her glasses? I mean if she gets up in the night to go to the john or something?”

“She won’t tell anybody. She’s lousy with secrets.” (24-25)

Ramona に会うことを切望する Mary Jane と、娘を見ることすらうんざりだともいのように目を閉じて Ramona に叫ぶ Eloise が対照的に描かれている。寒風吹く中帰ってきた Ramona への態度や、娘の眼への無関心さから、Eloise は母親として失格であるといわざるを得ない。

娘の Ramona は秘密をたくさん抱えているが、その秘密は本来母親である Eloise に伝えられるべきものである。しかし、娘への関心が薄い母親はそれを聞こうとせず、Ramona はそれらを自らの内にため込んでいかなければならなかっただろうと推測される。Ramona が Mary Jane に “I don’t like to kiss people” (25) というのも、他者との交流を拒絶する母親の態度の反映であり、William Wiegand が “Eloise’s unhappiness affects others” (128) というように、Eloise の生への消極的態度が、幼い Ramona にも大きな影響を与えている。Ramona は Jimmy Jimmereeno と行動を共にするが、彼は、母親とうまくコミュニケーションがとれないために Ramona によって創造されたイメージナリーフレンドといえる存在である。そのような Jimmy に対しても、Eloise は関心を示さない。Jimmy が車にひかれたという、Ramona にとって重大な報告も聞き流し、彼女を Grace の元へ送りこんで寝かしつけてしまう。Ramona は母の関心をひくことができず、“slowly giant-stepped her way out of the room” (34) と、怒りと抵抗を示しながら部屋を出て行くが、それ以上のことは何もできない。

しかし、Eloise と Ramona のその疎遠な母子関係は、物語の終盤、Eloise が Ramona が寝ている二階の部屋で大きく変化する。

Then, suddenly, she [Eloise] rushed, in the dark, over to the night table, banging her knee against the foot of the bed, but too full of purpose to feel pain. She picked up Ramona's glasses and, holding them in both hands, pressed them against her cheek. Tears rolled down her face, wetting the lenses. "Poor Uncle Wiggily," she said over and over again. Finally, she put the glasses back on the night table, lenses down. (37)

その瞬間を高橋美穂子は次のように説明する。

Eloise が長いあいだ、真暗な入り口にたたずんでいたのは、彼女に次々と新たな認識が襲ってきて動けなかったからである。とりわけ Ramona が、新たに空想上の恋人 Mickey Mickeranno を創出しなければならなかった理由を翻然と悟り、自分とまったく同じ孤独を苦しんでいることに、はじめて気がついたからである。(98)

後に見るように、自分と Ramona が同じ境遇にあることに気づいたこと、これが Eloise の「悟り」であったことは間違いない。その際、彼女が Ramona 本人に駆け寄るのではなく、Ramona の眼鏡を手にし、“Poor Uncle Wiggily” (37) と繰り返したことは、この「悟り」に Walt の影響が大きかったことを示している。この“Poor Uncle Wiggily”という台詞は足首を捻挫した Eloise をいたわる Walt の優しさを象徴する言葉である。彼女は Ramona よりも、まず先に Walt の言葉に自分の気持ちを向けたのである。

そこで、次に Walt とはどのような人物であったのか、またどのような影響を Eloise に与えたのかを考えていきたい。

sound of two hands clapping. But what is the sound of one hand clapping?”
（「隻手音声」）を一つの手がかりとしたい。少々回り道になるが、そもそも
「隻手音声」という公案がどのようなものか見ていくことにする。¹

この公案は日本人禅僧白隠慧鶴（1685-1768）が作ったものである。白隠は
長年の修行の末、42歳の時「豁然として大悟」（芳澤 2016、23）し、衆生の教
化へ力を注ぐようになる。禅宗においてその教義は不立文字とよばれているよ
うに、言葉では表現できないものとされる。この言葉にならない悟りの境地を
衆生に教えるための方便として作られたのが「隻手音声」である。

では、「隻手の音声」を聞くとはどのようなものなのだろうか。以下、白隠
の言葉を現代語訳で引用する。

隻手の工夫とはどういうことか。今、両手を相い合わせて打てば、パン
という音がするが、ただ片手だけをあげたのでは、何の音もしない。……

この隻手の音は、耳で聞くことができるようなものではない。思慮分別
をまじえず五感を離れ、四六時中、何をしている時も、ただひたすらにこ
の隻手の音を拈埵して行くならば、理屈や言葉では説明のつかぬ、何とも
致しようのない究まったところに至り、そこで忽然として生死の迷いの根
源、根本無明の本源が破れる。……いつしか、意識の根源は撃砕され、こ
の迷いの世界もまた根本から粉碎されており、ありのままの真実を見届
け、行動する智慧がそなわり、一切を正しく見透すことのできるもろもろ
の智徳の力がそなわっていることを確信できるのである。（芳澤 2001、
9-10）

本来、不立文字とされるものだけになかなかその本質を理解することは難しい
が、これに先立って述べられた以下の文章を読めば、「隻手音声」が行き着く
先が、「山川草木悉皆成仏」の気づきであり、一切が「空」であるとする仏教
の教えに通じるものであることがわかる。

……何としても一回、自性本有のありさまを、ご自分ではっきりと見届けること、このことが何にもまして肝要なことなのです。

その自性本有のありさまは、どうして見届けることができるか。……

どうしたら、その大悟の歡びを味わうことができるか。大疑の下に大悟有り、と申しますように、大疑団をおこすことです。今、この文を読んでいる、その主体は何か。日常生活においても、笑ったり悲しんだり、外界の事象にそれぞれ応じて働いていくもの、それはいったい何ものか。これは心か、性か。そのものは青黄赤白の色があるのか。内にあるのか外にあるのか、それとも中間にあるのか、と。その根源を、何としても一回、はっきりと見届けずんば措くまじと、一日中、絶え間なく励み進むならば、いつしか、あれこれ妄想し思う心もなくなり、一切の疑団もなくなり、一念も生ぜず、男でもなければ女でもない、賢くもなければ愚かでもない、生もなければ死でもない、心はひたすらカラリとして、昼夜の分かちもなく、心も身体もともに消え失せたような、そういう心境を、幾度も味わうことがあるでしょう。(芳澤 2001、4-5)

我々が当たり前のものとして経験していることを相対化し、その見方が主観によって引き起こされたものであること、あらゆるものはその実体をもたない「空」であることに気づくことが仏教の「悟りの境地」であり、白隠もまたそのことを意識していたと考えられる。もちろん、そこに至るまでには長い年月の修行が必要であり、凡夫が簡単に到達できるものでないことは言うまでも無い。

だが一方で、白隠は先に見たように衆生も悟れると考えており、そのための手段として「隻手音声」が考案された。沖本克己は、白隠のいう菩薩は、「まず自らが悟ることに眼目をおいて」おり、「真の悟りを得るためには自らの日常に全身全霊で打ち込むことが肝要」(247)で、「自らを、そして自らの行なっていることを信じること、つまり『自信』を持つということに尽きる」(249)

と解説する。日々の生活を真剣に生き、その中で「悟り」の道を切り開くことが白隠の菩薩道であり、そのための手段として日々隻手の音声为方便として、その音を聞き続けよとっているのだ。

日常生活が修行の場となる理由については、中村元の次の説明が参考になるだろう。

「われわれは迷いの世界にいる、輪廻のうちにある。かなたに涅槃（ニルヴァーナ）の理想の境地がある。けれども、よく考えてみると、どちらも本質においては空である。空であるからこそ、目的を達成することができる。本質は異ならぬものである」と。

そう考えますと、「われわれの現実の日常生活が、そのまま、理想的な境地としてあらわし出されねばならない」ということになります。……理想の境地をめざす動き、空の実践は慈悲行となってあらわれますが、それは現実の人間生活を通じて実現されるものであります。(40)

高橋は Salinger が「隻手音声」をエピグラフに掲げた理由を、主人公たちがあるきっかけを得て、「一つの悟りの瞬間を体験し迷妄から解放される様子を描きたかったから」(66) だとしている。増谷文雄は、初期仏教経典のある偈を説明する中で、仏教の本質を次のように説明する。

それは、けっして、自我を圧殺せよ、自己を忘却せよと語っているものではない。それどころか、この偈の語るところは、自己の人間形成のために全努力を集中せよというのであり、かくしてみごとな自己形成がなった時、そのとき、人ははじめて得がたい依処をうるのだという。いや、そもそもが、仏教は本来、人間形成、自己確立を説く宗教のほかのなにもものでもないのである。(増谷1996、145)

ここに述べられているように、仏教本来の教えが、「人間形成」、「自己確立」であるとするならば、Salingerが「隻手音声」を掲げたのは、主人公たち（ここではEloise）が迷妄から解放され、「自信」をもって生きることで、新たな自己認識を得ることを暗示するためであったと考えてよいだろう。²

このような白隠の考えを元に「隻手音声」を、次のように考えておきたい。一つは仏教の「空」の思想を念頭にいれながら、既存の見方へ懷疑を抱き新たな認識を得るための手段として、もう一つは、そこに至るために特別な修行を行うのではなく、日常の生活の中にその契機を見出すための手段として考えたい。主人公たちの「悟り」とは、「隻手音声」を聞くことで、日常のふとした瞬間に、思慮分別と五感の世界から解き放たれ、「なすべきことをなした」（鈴木 32）という「自信」をもって生きることで、新たなものの見方、新たな意味を獲得することなのである。

3

それでは、“Uncle Wiggily”に戻ろう。Waltとはどのような人物であったのか、またどのような影響をEloiseに与えたのかという疑問であった。EloiseがWaltについて言及するのは、主に““Poor Uncle Wiggily”と語りかける場面」、「徴兵直後の列車内での会話」、「軍隊での昇進について」、「彼の死の原因について」の4つである。ここでは、「列車内」と「昇進」について、詳しく検討してみたい。二つの場面を引用しておこう。

“Well, he [Walt] sort of had his hand on my stomach. You know. Anyway, all of a sudden he said my stomach was so beautiful he wished some officer would come up and order him to stick his other hand through the window. He said he wanted to do what was fair. Then he took his hand away and told the conductor to throw his shoulders back. He told him if there was one thing he couldn’t stand it was a man who didn’t look

proud of his uniform. The conductor just told him to go back to sleep.” (30)

Eloise laughed suddenly, from her diaphragm. “You know what he [Walt] said once? He said he felt he was advancing in the Army, but in a different direction from everybody else. He said that when he’d get his first promotion, instead of getting stripes he’d have his sleeves taken away from him. He said when he’d get to be a general, he’d be stark naked. All he’d be wearing would be a little infantry button in his navel.” (30)

二つの場面がどちらも服装に言及しているという点に注目したい。一方で車掌には制服に誇りを持っていいながら、軍人である自分は制服を捨て裸になるという、これらの Walt の発言は矛盾しているように思われる。では、この矛盾をどのように理解したらよいのだろうか。また、先に述べたように Eloise がこれらの発言に触発されて「悟り」を得、救済されたのだとすれば、それはなぜなのか。

服はそれを身に纏うことによって、身体 / 本体を覆い隠す役割を持っている。逆にいえば、服によって本体を偽ることも可能になる。つまり服と本体との関係は、恣意的なのである。もし車掌の服を着た人物が本体を偽り隠していたとしたらどうなるのか。そのような人間は悟りに至ることはできないし、そもそも社会にあっては失格といわざるを得ない。なぜなら、先に述べたように「真の悟りを得るためには自らの日常に全身全霊で打ち込むことが肝要」（沖本 247）であり、「自らの行っていることを信じること」（249）ができればならないからだ。車掌が悟りを求めているかどうかはわからない。だが、「靈的成長」を求める「求道者」（高橋 94）である Walt は、人間たるものその日常にあって常に「自信」をもち、正しく生きるための努力を怠るなという思いをこの言葉に込めたと考えられる。³

一方で「求道者」Waltは、その「日常の悟り」の次の段階へ向かう。これは白隠が禅の目的は衆生済度であり個人として悟りを開いたとしてもそれで終わりではないと考えることと通じる。軍服への言及は、Waltが服装という手段によって偽った仮の姿ではなく、剥ぎ取られた裸の姿、あらゆるものが実体をもたない「空」の状態ですべてを判断されることを望んでいることを示している。つまり、霊的成長をした人間は外見で判断されることはなく、その本体/本質によって理解されるだろうという彼の理想を語ったものではないだろうか。⁴

「車掌の制服」や「軍服」がその服を着る人物を表徴する。しかし、その姿を見る者の多くはその服装に惑わされ、ことの本質（本体）を見誤る。一方で、制服を纏う側はどうか。自己を偽ってはいないか、というのがWaltの問いかけだ。Waltにとって霊的成長とは、物事の本質に気づくことであり、その本質に相応しい振る舞いすることなのである。一方でWaltにとってそれは、人々に既存の見方に対して懐疑を抱かせ、新たな認識を得させるための手段でもある。このように見ていくと、Waltの発言は決して矛盾するものではないことがわかる。日常を生きる衆生として、日々自分のなすべきことに「自信」と誇りをもちそれに励むことで悟りを開けというWaltは、悟りを開いた後、白隠の「衆生済度」を実践するかのようにEloiseを救済するのである。

もう少しWaltについて見ていこう。新田玲子は「列車内」のWaltの行動を次のように説明する。

エロイズのお腹に置かれた片方の手が感じる幸福は私的な喜びである。それがあまりに大きいとき、ウォルトはもう一方の手を、〈窓〉の外に出すことで均衡を保とうとする。……しかも列車の〈窓〉から外は風が吹きすさんでいるし、命令を下すのが士官であることから、〈窓〉から出される手が体験するのは戦争のような過酷な状況であろう。(75)

そして、James Lundquist を引用し⁵、このような Walt の姿勢が「二極一致」という仏教概念で説明される (76) と指摘し、Walt が透徹した「鋭い認識力」をもつと同時に、それを「暖かく優しい人間的な好ましさに包み込む力を持っている」(76) と述べ、「ものの本質を見抜く能力と、その能力に押し潰されないう人間的な資質の両方を、非常に良い形で共存させる稀な存在である」(77) と述べている。

では、Eloise に物事の本質を見抜く力はあるのか。彼女は母親という役割を担った存在であるにもかかわらず、“‘Ramona,’ Eloise shouted, with her eyes shut” (24) とあったように、そもそも娘を見ようとしていない。見たとしても、“She [Ramona] looks like Lew. When his mother comes over, the three of them look like triplets” (24) と完全に外見に囚われてしまっている。夫 Lew への愛情が感じられないため Lew とそっくりな Ramona を Lew と同一視してしまい、Ramona 本体を見ることができないのだ。見ているのに見ていないという、まさに公案のような状況に Eloise はおかれている。また先に述べたように、彼女は過去の世界に囚われているため、現実を見ることができない。冒頭で彼女がキャメルのコートを着ていることも、彼女がそのコートを纏うことで自らの物質的満足感を表そうとしつつも、逆に精神的満足感が得られていないことを隠しているようにしか見えない。服装（記号）と彼女自身（本体）が一致していないにもかかわらず、彼女はそれに気づいていないのである。Walt の視点からいえば、外見に囚われ服によって自分の本心を隠そうとする現在の Eloise の姿は、霊的成長からはほど遠い状況にあるといわざるを得ない。

母親から見られることのない Ramona が置かれた状況を Edenfield は、“her [Ramona’s] eyesight symbolizes both her mother’s and her own inherited inability to see beyond their immediate pain and isolation” (307) と述べている。お互い理解できず、孤独であり、この状況を乗り越えられないという点では、Eloise と Ramona はパラレルな関係にある。これは、Ramona が孤独から Jimmy（車にひかれた後は、Mickey Mickeranno）を生み出したのと同様に、

Eloise も孤独であるがゆえに **Walt** との思い出に浸っているところにも表れている。しかも、その悲しみを **Ramona** 同様誰とも共有できず、抱え込んだままである。冒頭で見たような閉塞状況の中でこのような時間と空間にとらわれて近視眼的な見方しかできない **Eloise** は、物事の本質に対する深い洞察力をもつ **Walt** と対極の位置にあるとあってよいだろう。

しかし、**Eloise** は **Walt** の言動を思い出すことによって、隻手の声を聞く。増谷は『さとり』というものは直感である。直感というものは受動性のものである」(増谷 1979、22) と述べているが、その瞬間は突然訪れる。**Eloise/Walt** と **Ramona/Jimmy (Mickey)** との関係、つまり、亡くなった **Walt** の思い出を **Lew** に共感してもらおうとした自分と、**Jimmy** を殺すことで母親の共感を得ようとした **Ramona** が同じだと気づいたとき、**Eloise** に変化が起こる。彼女は **Ramona** の眼鏡に駆け寄ると “**Poor Uncle Wiggily**” と繰り返し、眼鏡を置いて **Ramona** にキスをする。ここでようやく **Eloise** は、自分が母親としての役割を果たしていないことに気づくのである。彼女がつるを下にして置いてあった (“**folded neatly and laid stems down**” (36)) **Ramona** の眼鏡を、その後レンズを下にして置く (“**put the glasses back on the night table, lenses down**” (37)) のは、高橋が「レンズに **Ramona** の視線を感じ、このレンズを通して **Ramona** が見てきたいままの自己を否定したい」(99) からと述べているように、これまでの自分とは異なる自分になるという **Eloise** の決意表明といえるだろう。

こうして **Eloise** は時間と空間に “**confine**” され、**Walt** が求めていた自分の生き方への「自信」ももてず、自分の役割を果たすこともできずにいたことに気づくことで、**Ramona** を愛する母親としての素直な感情、イノセンスを回復するのである。

結論

以上見てきたように、**Eloise** が母親としての役割に気づくためには、**Walt**

の存在、「教え」が不可欠であった。Walt は「隻手音声」を聞ける人物であり、「隻手音声」を「靈的成長」の手段として、「ものの本質を見抜く能力」と「その能力に押し潰されない人間的な資質」（新田 77）をもつバランスの取れた自己を確立し、白隠のいう「悟り」の境地に到達し、そして、Eloise を救済することになった。車掌の制服に象徴される、与えられた役割をしっかりと把握し、任務を全うすることを Eloise に示すことで、彼女もまた母親としての自分の立場を認識することの重要性に気づくのである。また、最後の場面で“brown-and-yellow dress”に Eloise が言及し、“‘I was a nice girl, . . . wasn’t I?’” (38) と語るのは、彼女が素直に人を愛せる生き方をしていた過去を振り返り、服（記号）と自分自身（本体）との新たな一体化、つまりこれまでの価値観にとらわれることなく「一切を正しく見透」せるような素直な、「空」なものとしての自己のアイデンティティを取り戻そうと意識し始めたことを暗示している。Lundquist のいう “apprehending the nature of the self” (75) という作用が Eloise に働き始めたといえるのかもしれない。

注

- 1 James Lundquist は公案の目的について、“its purpose is to profoundly acquaint the student with a way of thinking, a way of apprehending the nature of the self that is actually based on a theory of knowledge or what can be known” (74-75)、“The *koan* is the method by which the Zen master ‘instructs’ the student away from conventional knowledge and reliance on wrong-thinking” (76) と説明している。
- 2 鈴木大拙は、「釈尊の涅槃は、『是生滅法』ということよりも、『なすべきことはなした』という、いかにも平和な落ち着いた心持を、仏教では象徴しているように、自分は感ずるのである」(32) と述べている。涅槃の境地などといわれると、凡人にとって「悟り」は不可能のように感じられるが、このように考えると衆生を日常生活の中で「平和な落ち着いた心持」

(「悟り」)へ導くことの可能性が見えてくる。

また、Kenneth Slawenski は、「[Salinger が] 禅の思想を、芸術は精神性と結びついているという自分自身の確信と統合させるとき、それが執筆と瞑想はおなじものだという信念を生んだ」(295)と述べているが、これもまた「真の悟りを得るためには自らの日常に全身全霊で打ち込むことが肝要」(沖本 247)とする白隠の教えに通じるように思われる。

なお Slawenski によれば、Salinger は「1946年後半には、禅や神秘カトリック教を研究しはじめて」(241)おり、1950年には「鈴木大拙と知り合いに」(295)なっている。ケネス・スラウエンスキー『サリンジャー 生涯91年の真実』(田中啓史訳 晶文社 2013) 参照。

- 3 高橋は、「おのれに課されたつとめを、ひたむきに果たすことの大切さを語っている」(94)と説明している。
- 4 Walt の “He said when he’d get to be a general, he’d be stark naked. All he’d be wearing would be a little infantry button in his navel” (30) という姿は、我々がもつ “general” のイメージとの間にずれを生じさせ、一瞬我々の思考を停止させるという点で、公案に通じるものがある。本論からは少しそれるかもしれないが、Walt の死が、兵士であるにもかかわらず、「戦闘中」での「戦死」ではなく、「終戦後」の「事故死」であったという点も、Walt の特異な存在を象徴するように思われる。
- 5 引用箇所は以下の通り。
 . . . Walt was expressing a koan of sorts, reflecting the Buddhist conception of the duality of opposites, that there are pleasures so great that the only way they can be comprehended is through contemplation of pain that would be equally great. (88)

引用文献

- Edenfield, Olivia C. “Uncle Wiggily’s Haunted House.” *Teaching Salinger’s Nine Stories*. Ed. Brad McDuffie. Wickford: New Street Communications, LLC, 2011.
- Gwynn, Frederic L. and Blotner, Joseph L. “One Hand Clapping.” *Salinger: a Critical and Personal Portrait*. Ed. Henry A. Grunwald. New York: Harper & Row, Publishers, 1963.
- Levine, Paul. “J. D. Salinger: The Development of the Misfit Hero.” *J. D. Salinger and the Critics*. Ed. William F. Belcher and James W. Lee. Belmont: Wadsworth Publishing Company, Inc., 1964.
- Lundquist, James. *J. D. Salinger*. New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1985.
- Salinger, J. D. “Uncle Wiggily in Connecticut.” *Nine Stories*. Boston: Little, Brown and Company, 1991.
- Wiegand, William. “The Knighthood of J. D. Salinger.” *Salinger: a Critical and Personal Portrait*. Ed. Henry A. Grunwald. New York: Harper & Row, Publishers, 1963.
- 沖本克己『泥と蓮 白隠禅師を読む 座禅和讃 毒語心経 隻手音声』大法輪閣 2007年
- 鈴木大拙『禅とは何か』角川ソフィア文庫 2004年
- 高橋美穂子『J. D. サリンジャー論 「ナイン・ストーリーズ」をめぐって』桐原書店 1995年
- 中村元『仏典をよむ3 大乘の教え（上）一般若心経・法華経ほか』岩波書店 2001年
- 新田玲子『クラフツマン・サリンジャーの挑戦 サリンジャーなんかこわくない』大阪教育図書 2004年
- 増谷文雄『釈尊のさとり』講談社学術文庫 1979年

増谷文雄・梅原猛『仏教の思想 1 知恵と慈悲<ブッダ>』角川ソフィア文庫 1996年

松村明監修『大辞泉』小学館 1995年

芳澤勝弘『白隠禪師法語全集 第十二冊 隻手音聲 三教一致の辯 寶鏡窟之記 兎專使稿』禅文化研究所 2001年

—『白隠 禅画の世界』角川ソフィア文庫 2016年

A Study of J. D. Salinger’s “Uncle Wiggily in Connecticut”: ‘One Hand Clapping’ and Walt’s ‘Teachings’

Osamu Yamaguchi

Eloise in J. D. Salinger’s “Uncle Wiggily in Connecticut” lives her loveless life with her husband, Lew, and her daughter, Ramona. One day, seeing Ramona sleeping on one side of the bed, she suddenly has a *satori*, or an epiphany. Before she rushes to her daughter, she picks up Ramona’s glasses, and says “Poor Uncle Wiggily,” which are the words her ex-boyfriend Walt said to her when she hurt her ankle. This indicates that Walt has something to do with Eloise’s *satori*. This paper shows what Eloise’s *satori* is, how Walt’s words and actions lead to Eloise’s epiphany, and how a *koan*, ‘one hand clapping,’ which is the epigraph of *Nine Stories*, relates to Walt’s way of living.

The ‘one hand clapping’ is originated by Hakuin, a Japanese Zen Buddhist. According to F. L. Gwynn and J. L. Blotner, the purpose of a *koan* is “to stir up and readjust one’s view of things,” and it is a method to learn a way of apprehending the nature of the self while striving every day of one’s life. Hakuin especially emphasized the importance of making efforts and playing one’s part earnestly every day.

On the train with Eloise, Walt told the conductor that “he couldn’t stand it was a man who didn’t look proud of his uniform.” This remark shows Walt’s view on a way of living, “to perform one’s duties earnestly” and “to live true to oneself,” which is based on the idea of ‘one hand clapping.’ In that moment, Eloise has a *satori* that she and Ramona are both lonely because they have lost

their loved ones. She also realized that she doesn't play her part as a mother, unlike Walt who lives true to himself. Thus Eloise is affected by Walt's teachings based on 'one hand clapping.'

suddenly 考 (3)

黒宮 公彦

1

黒宮 (2016, 2017) に引き続き、suddenly には「状態変化が突然であること」を表す場合と「認識の変化が突然であること」を表す場合の2つの用法があるという仮説を検証していく。そのために be と suddenly が共起している文における suddenly の振る舞いについて、British National Corpus (以下 BNC と略記する) を使ってランダムに抽出した578例¹ を対象に調査する。

2

黒宮 (2016) の繰り返しになるが、578例中 suddenly が実際に be を修飾していたのは239例のみだった。このうち suddenly が < be + 形容詞 > を修飾している73例については黒宮 (2016) で、また < be -ing > を修飾している29例については黒宮 (2017) で、それぞれすでに詳しく見た。本稿では suddenly が受動文、すなわち < be + 過去分詞 > を修飾しているものなどについて考察を加えることにしたい。

2.1 be が受動文の助動詞である場合

黒宮 (2016:6) の(8)に挙げた2つの文を以下に改めて示す。

(1) a. At the end of August 1914 he was promoted to Brigadier on the field; so suddenly that an elderly spinster had to furnish him with stars unsewn from her

father's uniform. (BNC: K91)

b. Suddenly frightened, she wondered if she was going to have an operation[.] (BNC: H7H)

これらはいずれも **suddenly** が < **be** + 過去分詞 > を修飾している例である。こうした例からも見て取れるが、**suddenly** が **be** を修飾している場合、**be** は受動文の助動詞として用いられていることが多いのではないかと予想される。事実、239例中79例で受動文の助動詞としての **be** だった。なお黒宮 (2016) で詳しく説明したとおり、(1a) (黒宮 (2016) の (8a)) の **suddenly** が何を修飾しているかは文脈から判断するしかないが、それは “was promoted” だと考えられ、**suddenly** が < **be** + 過去分詞 > を修飾している例に該当する。また (1b) (黒宮 (2016) の (8b)) に見るように明らかに **being** が省略されている文も6例見られたが、これらも **suddenly** が < **be** + 過去分詞 > を修飾している例に該当すると判断した。上に述べた79例とはこれら計7例を含めた数字である。他方 **be interested** が用いられているものが1例見られたが、この **interested** は形容詞と見なし、受動文ではなく形容詞の例に含めた。

さて、黒宮 (2016) で見たように Comrie (1976:19) は、動詞の完結相と非完結相² とが区別される言語では状態動詞の完結形が起動相を示すことがあると指摘した。しかしそれ以前に、そもそも英語の < **be** + 過去分詞 > 型の受動文は必ずしも状態受動を表すとは限らない。動作受動であることをはっきりさせるために **get** が用いられることもあるが、動作受動でもむしろ **be** を用いる方が普通だと思われる。要するに **suddenly** に修飾されている < **be** + 過去分詞 > は、原則として、状態変化を伴う受動態を表しているのであって、結果状態としての受動態ではないのである。したがって **suddenly** と共起しても何の不思議もない。換言すると、< **be suddenly** + 過去分詞 > は基本的に「状態変化が突然であること」を表すということである。何例か確認しておこう。

(2) a. I was near St Anthony's Hospital, between Bishopsgate and Bread Street, intent on lifting a purse, when my arm was suddenly seized[.]

(BNC: HH5)

b. She and Ethel were halfway down the next flight of stairs when they were suddenly joined by Bryce.

(BNC: AN7)

c. If you were suddenly faced with an emergency, would you know how to cope?

(BNC: G2T)

なお黒宮 (2016:10-11) では状態変化を「物理的な状態変化」と「人間の内面における変化」とに分けて考えるべきだと主張したが、(2a, b) は物理的な状態変化の例だと言える。他方 (2c) は物理的な変化に重点が置かれてはいるものの、その状態変化に対して「緊急事態が発生した」と認識する人間が存在して初めて成立する事態でもあるので、人間の内面の変化もある程度絡んでいる。そして中には次の(3)のように人間の内面の変化に重点が置かれていると考えられる例も見られる。

(3) a. I was suddenly filled with fear and doubt. (BNC: GUW)

b. Halfway up she paused, fighting for breath, suddenly struck by the enormity of what she was doing. (BNC: JYC)

c. How poisoned all my thoughts suddenly are, thought Ludens.

(BNC: APM)

黒宮 (2016) では < be suddenly + 形容詞 > を分析したが、その中で状態変化には物理的なもののみならず人間の内面における変化もあることを認めたのだった。そして過去分詞はある面で形容詞に似た性質を持っているのだから、形容詞の場合と同様 < be suddenly + 過去分詞 > にも人間の内面の変化を表す例があっても不思議ではない。実際 (3a) の “was suddenly filled with” は

“was suddenly full of” と言い換えることも可能ではないかと予想される。もっとも、状態受動を表す < be + 過去分詞 > の過去分詞が形容詞に似ているのは確かだが、すでに述べたとおり < be suddenly + 過去分詞 > は基本的に動作受動文である。このため < be suddenly + 形容詞 > と比べ、突然の状態変化ということに関して解釈しづらい例は少なかった。

さて、79例中5例は少々特殊なものである。次にこれら5例について見ていきたい。

2.1.1 完了受動形と suddenly との共起

まず、suddenly が完了受動形の動詞に掛かっている例文が3例見られた。これらはすべて動作受動であって状態受動ではないと思われるが念のために見ておく。

(4) a. [...]said Archie, highly gratified that things had suddenly been made easy for him. (BNC: CKE)

b. [...]those of us who had that upbringing about the purity of that Royal Family that's suddenly been confronted with this image[...] (BNC: J40)

c. The sphere of influence has suddenly been increased and another 300,000 people are likely to be attracted towards Hull. (BNC: B1H)

(4a) は過去完了の受動態の例である。これは “said Archie” が過去の出来事であり、その過去の時点から見て “things had been made easy for him” はさらに過去のことであるため、いわゆる「大過去」を表すために過去完了が用いられていると考えられる。つまりこの過去完了形は完了のアスペクト³というよりはむしろ前過去⁴の時制を示すものであると言える。そうであれば受動形の方も前節で確認したのと同様の動作受動の例であろう。もっともこの例もそれほど単純ではない。物事が何らかの変化をしたのは確かであり、それは

“said Archie”よりも前の時点のことであるが、その変化の結果を Archie が “easy for him”だと認識したのは “said Archie”と同じ時点だというのは十分にあり得る。ここに suddenly が加わると、果たして状態変化が突然だったということなのか——(4a)を文字通りに受け取ればそうなる——それとも “said Archie”の時点で「物事が自分にとって楽な方向へと変わった」と突然認識したということなのか、判然としない。どちらにも受け取れるように思われる。

他方(4b, c)は現在完了の受動態の例⁵である。英語の現在完了形には完了・結果・経験・継続の4つの用法があるとよく言われるが、suddenly と共起しているということはこのうちの完了の用法だと考えられる。また受動形については、現在完了形とともに用いられているため、「～という変化が起こった」という動作受動の意味と「その結果状態が今も継続している」という状態受動の意味の両方を併せ持っているように感じられる。つまり「変化が今まさに、突然起こったところであり、その結果・影響は現在はもちろんのこと、今後も当面は継続するだろう」というニュアンスを帯びているように思われる。その中で suddenly は動作受動、すなわち「変化が今まさに起こったこと」の側面を修飾していると考えられ、結局(4b, c)のような現在完了の受動態であっても suddenly が修飾しているのは動作受動だということになる。

2.1.2 進行受動形と suddenly との共起

黒宮(2017)でも触れたが、わずか2例ではあるが suddenly が進行受動形(progressive passive)の動詞に掛かっている例が見られた。以下にそれを示す。

(5) a. But suddenly the D word is being dropped in fashion[.] (BNC: CGC)

b. By 1844, when Wordsworth so fiercely objected to the coming of the railway, many more people were being attracted not just for the natural attributes of the area but for all those extra attractions which were suddenly being introduced such as ‘wrestling, horse and boat races, and pot-houses and beer-

shops.’

(BNC: B3H)

この進行受動形についてはQuirk *et al.* (1985:159) やLeech *et al.* (2001:364) 等で言及されているが、そのようなものがあると述べられているだけで、その機能については特に何も述べられていない。ここから進行受動形は単に「受動態でかつ進行相」を表すのみで、それ以上の特殊なニュアンスを帯びてはいないと予想される。幸いSwan (2005:386) がこの点について明確に述べている。

(6) Passive tenses are normally used in the same way as active tenses. So for example the present progressive passive is used, like the present progressive active, to talk about things that are going on at the time of speaking[.]

つまり能動態であれ受動態であれ、進行相を表しているという点では大差ないということだ。

進行能動形と *suddenly* との組み合わせについては黒宮 (2017) で詳しく扱った。その中で、動詞の表す動作が意図的に行われるものかどうかで次の4つに分けるのが重要だと述べた (黒宮 (2017) の(6))。

- (7) a. 認識者が動作主で、動作が意図的に行われるものである場合
- b. 認識者が動作主で、動作が意図的に行われないものである場合
- c. 認識者が動作主でなく、動作が意図的に行われるものである場合
- d. 認識者が動作主でなく、動作が意図的に行われないものである場合

これはあくまでも動詞が能動態であることを前提としていた。受動態には動作主を焦点から外し背景に回す機能があるので、受動文では動作主が明示されないことも多い。このため動作主の意図性も背景に押しやられてしまう。結果

として受動文については (7b) か (7d) かのいずれかだということになる。加えて、動作主の視点から動作を認識する場合に受動態で表現されるとは考えにくい⁶ ので、結局進行受動形と suddenly とが共起する場合は (7d) が基本となると予想される。その上で黒宮 (2017) の議論を考慮に入れると、進行受動形は「いつの間にやら急に～されている」という意味を表すのではないか。つまり通常受動文における suddenly は2.1節で見たように突然の状態変化を表すのが基本だが、進行受動文における suddenly は突然の認識の変化を表すのが基本だと考えられる。わずか2例から結論を導くのは性急に過ぎ危険ではあるが、少なくとも(5)に関してはこの解釈が当てはまる。

2.2 be NP と suddenly との共起

suddenly が be を修飾している239例中わずか13例ではあるが、be NP、すなわち名詞句が後続している be を修飾しているものが観察された。わずかな例から結論を導き出すことはできないが、ある程度の傾向は認められるように思われる。

まず、名詞句が主語の本質的な属性を示している例が比較的多く見られた。モノにとって最も本質的な属性は「モノがそれ自体であること」であるが、このような「Xが突然それ自身になった (戻った)」、あるいはその否定形で「Xでなくなった」という、同語反復文にも似た例が2例ではあるが見られた (次の (8a, b)) のはとりわけ興味深い。

(8) a. And suddenly, I was that same, frightened Dorothy all over again.

(BNC: A0F)

b. And suddenly, the great steel hulk was no longer a hulk. (BNC: BPA)

c. Hollywood Indians aren't what they used to be. First, they're not Indians but Native Americans. Second, they're no longer played by ugly gits like Charles Bronson, but by pretty ethnics such as Lou Diamond Phillips who

can plausibly claim to have Cherokee blood somewhere in their veins (it was this which landed Phillips the lead in *The Dark Wind*, the recent Robert Redford-backed adaptation of one of Tony Hillerman's Navajo detective novels). Third, they are suddenly the good guys. No longer murderous savages or martyred innocents, they are now Nineties guys in touch with their inner feelings as well as the outer fringes of the ecology movement. (BNC: CD5)

d. And suddenly it wasn't a play any more. (BNC: G3E)

(8c) で直接問題となるのは“they are suddenly the good guys”の箇所だが、これだけでは判然としないので前後の文脈を少々長めではあるが引用した。the が用いられていることと、前後の文脈から判断すると the good guys はインディアン（ネイティブアメリカン）の本当の姿を指しているとも考えられ、(8c) も (8a, b) の類例だと言える。(8d) も「もともと遊びであったはずのものが突然遊びでなくなった」ことを表しているから類例である。

次に、主語が節である例が多数観察された。こうした例の中にはある種の分裂文や文法上の主語が仮主語の it であるような例も含まれる。そうした文は「～することは突然～になる」という意味を表すわけである。

(9) a. Suddenly, though, trading one career for another is no longer just a way to obtain release from a boring job. (BNC: BMB)

b. Suddenly, all he was aware of was one single, frozen thought[.] (BNC: AC4)

c. It was suddenly a great relief to be able to speak the truth. (BNC: B0U)

d. [S]uddenly to walk in and to see a sea of faces, all of whom I knew well, was the most tremendously stirring moment. (BNC: G2E)

上記 2 タイプのいずれにも当てはまらないものは次の 3 例のみだった。

(10) a. His death was suddenly the birth of a whole new cult. (BNC: CDG)

b. The image of the planet receded and Tarvaras was suddenly a component of a larger system. (BNC: FSE)

c. Disaster recovery is suddenly big business, with even users of machines as small as the IBM Corp RS/6000 wanting the security of a share of a back-up system[.] (BNC: CST)

いずれにせよ < be + 名詞句 > の名詞句は形容詞的な役割を果たしていると言える。< be suddenly + 形容詞 > については黒宮 (2016) で見たが、その多くは be が「なる」の意味を表し、suddenly が突然の状態変化を表している例だった。これと同様に < be suddenly + 名詞句 > も be が「なる」、suddenly が突然の状態変化を表しているものが多い。(9b-d) や (10b) などはその例だと言えよう。認識の変化もある程度は関わっているのかもしれないが、少なくとも前面には押し出されてはいないように感じられる。

ただし両者には違いもあって、形容詞の場合は状態変化が瞬間的に生じても不思議でないものが多い。特に、黒宮 (2016) で見たように、quiet や silent、あるいは voice を主語とした harsh、人の態度、とりわけ話し口調を形容する serious など、音に関連した形容詞と suddenly との組み合わせが多く見られた。音は生じるとすぐに耳に届くものである⁷、変化が起こった時点と認識者がそれを認識する時点とにずれがほぼない⁸。これに比べると < be suddenly + 名詞句 > の名詞句の場合は変化に時間の掛かるものが多い。例えば (10a) で、「彼」の死によって新たなカルト集団が突然誕生したのだとしても、その「突然」とは決して瞬間的なものではあり得ないし、おそらく1日や2日で生じた変化でもないだろう。あるいは (8c) にしても、それまではハリウッド映画の中で差別的な扱いを受けてきたたネイティヴアメリカンがある日を境に突然まったく差別のない描かれ方をするようになったわけではないだろうし、ましてやそのような変化がある瞬間に生じたはずもない。なのでこうし

た例では認識者が変化前の状態と変化後の状態とを捉え、変化前の状態が続いた時間に比べ変化に掛かった時間がごく短かったことや、変化が予測不能で意外だったため結果として唐突に感じられたことなどを総合的に判断した結果、相対的に **suddenly** だと認識されてそう表現されたのだと考えられる。

我々は時間を掛けて徐々に進行していく変化に対して「いつの間にか、気がついたら変わっていた」という反応を示すことが多い。それが予想外のことであれば「突然」と表現しても不思議ではない。となると < **be** + 名詞句 > を修飾する **suddenly** はむしろ認識の変化を表すのではないかと予想されるが、実際には判断に迷う例が多い。これは筆者が黒宮 (2017) で述べた、認識者が事態を内側から主観的に捉えるか、外側から客観的に眺めるかの違いと関連していると考えられる。(8a) は主語が I であるので分かりやすい。明らかに認識者が事態を内側から捉えている例であり、「自分がいつの間にか以前の **Dorothy** に戻っていることに気づいた」ということだから認識の変化だと言える。これに対して (8c) は、上に述べたとおり 1 日で生じ得るような変化を表しているわけではないが、それでもハリウッド映画界における客観的な変化について述べており、認識の突然の変化というよりは、ハリウッド映画の長い歴史から見ると相対的に短い期間に生じた急激な変化ということで **suddenly** が用いられていると考えられる。(9a) や (10a, c) も同様の例だと言ってよいだろう。そして (8b, d) はこれらの中間、すなわち認識者が主観的に捉えているとも客観的に捉えているとも受け取れる例である。どちらになるかは文脈にもよるし、黒宮 (2017) で論じたように、読者が認識者と認識を重ね合わせて主観的に受け止めるか、あくまでも事態を客観的に眺めるかによっても変わってくる。

2.2.1 **be of NP** と **suddenly** との共起

わずか 1 例ではあるが **be of NP** が **suddenly** と共起している例が見られた。

(11) Quite suddenly whether Anne worried or what she thought were not of the least importance. (BNC: H0F)

これはいわゆる疑似分裂文であり、しかも **not** と **least** で実質上二重否定になっていて、加えて **suddenly** は **quite** で修飾されているなど様々な意味で変則的な文ではあるが、**be of importance** は **be important** とほぼ同じ意味を表すのだから、< **be suddenly** + 形容詞 > に準じるものと考えていいだろう。すでに述べたように < **be suddenly** + 形容詞 > では **be** が「なる」を意味し、**suddenly** が突然の状態変化を表している例が多く観察されたわけだが、(11)でも同様に **be** は「なる」を意味している。また状態変化については（物理的変化ではなく）黒宮（2016）で見た「人間の内面における変化」だと考えられる。

なお **be suddenly** + 前置詞 + 名詞 > というパターンのうち、前置詞が **of** 以外のものについては **be** が「存在」を表すものだった。こうした例についての考察は紙面の都合上「suddenly 考 (4)」に譲りたい。

2.3 **be as though** と **suddenly** との共起

be に **as though** 等「まるで～のような」という表現が後続するものと **suddenly** とが共起している例が4つではあるが見られた。内訳は **as though** が2例（うち1例では“**a though**”と明らかな誤記が認められる）、**like** が1例、**if** (**as if** の意味で用いられているもの。もしかするとこれも誤記かもしれない) が1例である。

(12) a. Suddenly it was as though they weren't enemies at all, but locked in a passionate, warm embrace. (BNC: JXT)

b. As I looked closer they began to open their wings, and suddenly it was a [*sic.*] though purple brooches had been pinned about the bracken to catch the

sunlight. (BNC: BMD)

c. Suddenly it was like living out a Grade B TV movie. (BNC: CDX)

d. The dream lingered through the endless moments while I trudged up the clinging sand, seeing our little cottage grow larger and more ominous, till suddenly it was if the film director grew tired and cut to me opening the cupboard door and peeping out. (BNC: H8M)

いずれの例も主語はその場の状況を表す *it* であり、また *suddenly* は *it* の直前に置かれているという共通点がある。*be* は「なる」、*suddenly* は突然の状態変化を表しており、全体で「状況が突然まるで～のようになった」という意味となることも共通している。もっとも「AはBのようだ」というのは客観的なものではなく、認識者が主観的にAとBとの間の類似性を捉えて表現したものであるから、黒宮 (2016) で論じた「物理的な状態変化」と「人間の内面における変化」の二重構造になっていると考えられる。つまり物理的な状態変化は、それはそれで生じているのだが、その変化を「どのような変化と捉えるか」という側面に関しては認識者の主観的・心理的な判断が関わっていると言える。

3

本稿をまとめると以下のようになる。まず *suddenly* が受動文を修飾している場合には基本的に状態変化が突然であることを表している。ただし *suddenly* に修飾されているのが進行受動文の場合は— 具体例が少ないので明言はできないが— 黒宮 (2017) で見た *suddenly* に修飾されている進行能動文と同様に、認識の突然の変化を表す傾向が見られる。

また *suddenly* が < *be* + 名詞句 > や < *be of* + 名詞句 > < *be as though* 等 > を修飾している場合も基本的には *be* は「なる」、*suddenly* は突然の状態変化を表していると言える。もっとも < *be* + 名詞句 > の場合は突然の認識の

変化を表す例も散見され、両者の違いには文脈や認識者および読者による事態の捉え方が関わっている。

(「suddenly 考 (4)」に続く)

注

- 1) この点については黒宮 (2016) を参照のこと。
- 2) 黒宮 (2016) 注3および黒宮 (2017) 注3の繰り返しになるが、ここでいう「完結相」「非完結相」とはそれぞれ **perfective**、**imperfective** のことであって、とりわけ前者は英語では「**have** + 過去分詞」で示される **perfect** のことではないので注意。
- 3) この「完了」は **perfect** のことである。上記注2も参照のこと。
- 4) 過去のある時点から見てさらに過去の出来事を表す時制をいわゆる学校文法では「大過去」と呼ぶが、言語学では「前過去」と呼ばれることが多いように思われる。
- 5) 因みに (4b) は会話文から取られたものであり、前後を省略したが、文法的に見るとおかしな点が多々ある例文である。
- 6) この点については、我々がいかにして認識者を特定しているかを考えると納得できよう。黒宮 (2017) でも触れたが、認識者が動作主だと判断されるのは (i) 文の主語が I であるか、(ii) 小説等において、文の主語が三人称ではあるが、作者がその人物の視点から出来事を捉えて表現している場合のみ当てはまる。他方、受動態とは焦点が動作主ではなく被動作主に当たっていることを示すものであり、主語も被動作主になるから、我々是否応なく出来事を被動作主の視点、もしくは客観的な視点から捉えることとなる。したがって受動文で表される事態を動作主の視点から認識するのは困難だと言える。
- 7) 音と **suddenly** との関わりや視覚によって捉えられるものとの違いについ

ては「suddenly 考 (4)」で取り上げる予定である。

- 8) ただし「音がすること」と認識との間にずれが生じることはあり得る。黒宮 (2017) の (1e) の例文を参照のこと。

引用文献

British National Corpus <http://www.natcorp.ox.ac.uk/>

参考文献

Comrie, Bernard (1976), *Aspect*, Cambridge: Cambridge University Press.

Croft, William (2012), *Verbs-Aspect and Causal Structure*, Oxford: Oxford University Press.

Dowty, David R. (1979), *Word Meaning and Montague Grammar*, Dordrecht/Boston/London: D. Reidel Publishing Company.

黒宮公彦 (2016)、「suddenly 考 (1)」、『大阪学院大学外国語論集』第72号、pp.1-17.

—(2017)、「suddenly 考 (2)」、『大阪学院大学外国語論集』第73号、pp.49-64.

Leech, Geoffrey, Benita Cruickshank, Roz Ivanič (2001), *An A-Z of English Grammar & Usage*, new edition, Essex: Pearson Education Limited.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985), *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman.

Swan, Michael (2005), *Practical English Usage*, third edition, Oxford: Oxford University Press.

Vendler, Zeno (1967), “Verbs and Times”, in *Linguistics in Philosophy*, Ithaca, New York: Cornell University Press, pp.97-121.

On *suddenly*: Part 3

Kimihiko Kuromiya

This article proposes that the word *suddenly* has two senses, one which represents an instantaneous change of state, and the other describing a speaker's realization of a change of state that has already taken place before the utterance.

In Part 3 we will continue to verify the proposal above through observing some more sentences, taken from *British National Corpus*, where *suddenly* modifies <be + Past Participle>, <be + Noun>, etc.

大阪学院大学外国語学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学外国語学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、外国語学、外国文学の研究を通じて学界の発展に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学外国語論集」の発行
 2. 研究会、講演会および討論会の開催
 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で外国語学、外国文学を専攻し担当する者
 2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の機関誌その他の刊行物の配布を受けることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選は2期までとする。
1. 会 長 1名
 2. 副 会 長 1名
 3. 庶務・編集委員 4名
- 第8条 会長は会員の中から選出し、総長が委嘱する。
副会長は会長が会員の中から委嘱する。
委員は会員の互選にもとづいて会長が委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 会長は会務執行に必要なとき、会員の中から実行委員を委嘱するこ

とがある。

第12条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。

第13条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金その他の収入をもってあてる。

第14条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。

本連合に関する規程は別に定める。

第15条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第16条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認をうるものとする。

附 則

1. この会則は、昭和49年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成3年4月1日から改正し施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日から改正し施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日から改正し施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日から改正し施行する。

以上

大阪学院大学外国語論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は外国語学、外国文学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格
 - イ. 投稿者は、原則として本会の会員に限る。
 - ロ. 会員外の投稿は役員会の承認を必要とする。
3. 原稿は次のように区分し、その順序にしたがって編集する。論説、研究ノート、翻訳、書評など。
4. 原稿用紙は、本学の200字詰用紙を横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。

ワードプロセッサ使用の場合は、A4判用紙を使用し、1ページを35字×27行とし、16枚程度までとする。

外国語文の場合はA4判用紙を使用し、5,000語程度までとする。

論文本文が日本語文の場合は300語以内の外国語文の、また本文が外国語文の場合は900字以内の日本語文の、概要を付ける。

外国語による論文および概要は、投稿前に当該外国語母語話者によるチェックを受けることが望ましい。
5. 投稿論文の掲載の可否は、2名の査読者による査読結果に基づき編集委員会で判断する。
6. 発行は原則として、前期・後期の2回とし、6月・12月とする。年間ページ数は300ページ以内とする。
7. 抜刷は40部を無料進呈し、40部を超過希望の場合は編集委員会で超過費用を決定する。
8. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。

なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
9. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が、複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、平成29年4月1日から適用する。

以 上

大阪学院大学外国語論集執筆要領

1. 原稿は最終的な正本とする。校正の段階でページ替えとなる加筆をしない。
2. 欧文は1行あきにタイプすること。
3. 邦文原稿の挿入欧文は、タイプもしくは活字体で明瞭に書くこと。
4. できるだけ現代かなづかいと当用漢字を用い、難字使用の時は欄外に大書する。
5. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
6. 注はまとめて本文の末尾に置くこと。

インデックス番号は上つきとして通しナンバーとする。その他の書式については、会員が所属する学外の学会の規程に準ずるものとする。(例えば、英文原稿の場合は、*MLA Hand book for Writers of Research Papers* に準拠すること。)

7. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示すること。説明文は別紙にまとめる。
8. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は厚手の台紙にはりつけて、希望の縮尺を記入すること。
9. 執筆者校正は3校までとし朱筆のこと。3校以前で校了してもよい。
10. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるのでとくに注意されたい。

ア. 校正のさい、内容に大きな変更は認められないが、やむをえず行って組換料が生じたとき。

イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわる場合。

11. 原稿の提出期限は原則として9月末と3月末とする。
12. 原稿の提出先は編集委員あるいは図書館とする。
13. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し入れる。

以 上

執筆者紹介（掲載順）

山 口 修 経済学部 准教授

黒 宮 公 彦 情報学部 准教授

編集後記

第74号をお届けいたします。本号には2篇の論文を掲載することができました。ご多忙のところご投稿くださったお二方に心よりお礼申し上げます。

本学では本年度より「クォーター制」が導入されました。学生たちにとって、留学やインターンシップに挑戦し易くなる、ターム毎に再スタートができるなどの利点がある一方、学期の期間が短い分、油断をすと出席が足りない、課題が提出できないなどの理由で単位修得が難しくなる側面もあるようです。教員にとっては、学生の教育に今まで以上にきめ細かく丁寧に時間を費やすことが求められる転機でもあったのではないのでしょうか。

しかし、「紀要」は教育と並び、大学の健全さを測る重要なバロメーターでもあります。少数の会員による小さな学会ではありますが、大学教員として教育と研究のよいバランスを心掛け、多岐にわたる分野の会員が互いに刺激し合い、『外国語論集』がさらなる活発な研究発表の場となるよう、会員のみなさまのご協力をお願い申し上げます。

(K.Y.)

大阪学院大学外国語学会役員

会 長 川本 裕未

副 会 長 吉村 京子

編集・庶務委員 黒宮公彦・笹間史子・安富由季子・山口 修

大阪学院大学外国語論集 第74号

平成29年12月20日 印刷 編集発行所 大阪学院大学外国語学会

平成29年12月31日 発行 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

電話 (06) 6381-8434 (代)

発行人 川本 裕未

印刷所 大枝印刷株式会社

吹田市元町28番7号

電話 (06) 6381-3395 (代)

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES

No. 74

A Study of J. D. Salinger's "Uncle Wiggily in Connecticut": 'One Hand Clapping' and Walt's 'Teachings'	Osamu Yamaguchi	1
On <i>suddenly</i> : Part 3	Kimihiko Kuromiya	19

December 2017

THE FOREIGN LANGUAGE SOCIETY
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY